被爆人形「展示続けて」

広島平和記念資料館

改修後に撤去予定 市民ら1万人署名

2015 ヒロシマ ナガサキ

原爆投下の悲惨さを伝える広島市の広島平和記念資料館が改修後の展示で揺れている。「より実物を重視した展示」（資料館）を目指す中で、被爆直後の人々の姿を再現した「被爆人形」が撤去される予定だ。市民からは「訪れた人に分かりやすく惨状を伝えるために残してほしい」という声が出ている。

【29面に関連記事】

資料館は1955年に広島市が整備。本館と東館の2棟があり、延べ約2421平方㍍の展示フロアに焼け焦げた学生服や被爆直後の惨状を描いた市民の絵、地上模型など約500点を展示してきた。市は施設の老朽化に伴い昨年3月から大幅改修に着手。2018年春のリニューアルを目指して観覧ルートを大幅に変更、展示内容の充実を図る。

その中で打ち出されたのが、本館を入ったところにある被爆人形の撤去だ。原爆被害の研究者や有識者ら11人でつくる展示検討委員会が撤去方針を確認、13年3月の市議会で明らかになると、市民から異論が上がった。市議会でも「来館者の中に怖がる人がいるから撤去するのか」との指摘が出た。

これに対し、資料館は04年度に実施した来館者アンケートを示して理解を求める。45分間の平均観覧時間のうち、先に訪れる東館は26分、本館は19分だった。本館は被爆者の遺品や実物のがれきなど原爆投下の実相を展示しているが、被爆前の広島や復興に関する資料をそろえた東館より観覧時間が短かった。

このため改修後は本館で30分以上観覧してもらえるよう、①8月6日の惨状②放射線による被害③魂の叫び④生きる―のコーナーを設置。資料館は「原爆の非人道性やむごたらしさが伝わるよう実物を重視する」という。

しかし、市民らは被爆人形の展示継続を求めて署名活動を開始。14年9月、1万人以上の署名を市議会に提出した。発起人の会社員男性は「子どもや多くの人に理解してもらうためには分かりやすさも必要ではないか」と訴える。

近年、資料館には外国人の姿も目立つ。14年度の外国人来館者は約23万人と10年前の約2倍で、全体の約18％を占める。被爆人形を見たリトアニアの女子高生ヤバ・オティリアさん(15)は「広島でどんなことが起こったか分かった。涙が出た」と述べた。

署名活動を受けて、市は被爆人形を保存して企画展などで活用する方針だ。資料館の増田典之副館長(56)は「次世代を担う若い人にも分かりやすいような工夫もしていく。実物から伝わるものは大きい。資料館の再生と考えてほしい」と話す。

（西島宏美）

広島平和記念資料館の改修後、撤去される予定の「被爆人形」＝広島市